

東西の美

シャガール版画と江戸の浮世絵

メナードコレクションの核の一つに、シャガール版画の一群がある。シャガールはピカソと並んで、世界的な画家であると同時に20世紀最高の版画家と称せられる。当館では、カラー・リトグラフ集の傑作《タフニスとクロエ》《アラビアン・ナイト》《神々の大地》《サーカス》4作品全94点を所蔵している。従ってシャガールの版画だけで、タイトルを付して展覧会をすることが出来、又これまでに開催回数も多い。それだけ多くの方々に共感をいただいていると言える。特に《タフニスとクロエ》は、捨て子の男女が紅糸曲折を経て結ばれるという牧歌的な恋物語をもとにした42枚の構成で、その明るい色彩と展開の面白さから、まるで絵本を繰って観て歩く楽しさがあり、展示室では、若者やカップル、妊婦さんまで愛と夢の世界に浸っているのが印象的であった。

シャガール以外でも、版画のコレクションとして20世紀を代表する画家マティスの切り紙絵をもとにした20点の版画集《ジャズ》があり、深い宗教性のあるルオーのエッチングによる版画集《ミゼレーレ》58点の他、《サーカス》(シユアレス版)8点、《流れ星のサーカス》17点、《パッション》(受難)17点、《悪の華》12点と層も厚い。ピカソについては優品の《毛皮の襟をつけたオルガ》があり、最初の妻オルガを描いた初期の油彩画と違い、これは5年後の彼女をエッチングで表現している。共にピカソの描写力がよくわかる写真に基いた珍しいものである。

ところで日本の版画家をひとり挙げるとすれば棟方志功であろう。彼の最高傑作は、ヴェネチアとサンパウロの両ビエンナーレでグランプリに輝いた《釈迦十大弟子》である。二菩薩を加えた12点の木版画だが、彼が版画と名付ける様に、鋭い鑿の切れ味が観てとれる迫力がある。

メナードコレクションの主体は近代絵画であるが、古美術品や工芸も重要な一角である。平安の古筆、琳派の絵画、中国の古陶磁、桃山の陶芸、近代の人間国宝による工芸品など多士済々だが、特筆すべきは浮世絵の世界で

ある。所蔵は僅かだが浮世絵と言えばこの一点と言われる葛飾北斎の《富嶽三十六景 凱風快晴》があり、東洲斎写楽の貴重な大首役者絵、《市川男女蔵の奴一平》がある。共に近代西洋絵画に大いなる影響を与えたもの。更に北斎の娘葛飾応為の《夜桜美人図》がある。これは肉筆浮世絵で、版画の遺されていない彼女の少ない肉筆作品の一点で、一九九八年ワシントンナショナルギャラリーで開催された「江戸展」に出品した貴重な一点である。古美術や工芸は展覧もそんなに多くはないので、この機会に是非ご来館をお奨めする次第である。

(メナード美術館顧問)



葛飾北斎 《富嶽三十六景・凱風快晴》1831頃

メナード美術館開館25周年記念
コレクション名作展Ⅱ
古美術と版画 一秘められた美—
2013年4月14日まで開催